日本現代文學全集・講談社版

井伏鱒二
永井龍男
集

日本現代文學全集
75
井伏鱒二・永井龍男集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和37年2月10日　印刷
昭和37年2月19日　發行

定價　450圓

© KŌDANSHA 1962

著者　井伏鱒二　永井龍男

發行者　野間省一

印刷者　北島織衛

發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽2-12-21
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振替東京 3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製本　株式會社大進堂
製函　株式會社岡山紙器所
株式會社第一紙工社
背革　株式會社石井
表紙クロス　日本クロス工業株式會社
口繪用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

井伏鱒二集　目次

筆蹟

山椒魚……七
鯉……一一
屋根の上のサワン……一三
丹下氏邸……一七
青ヶ島大概記……二五
多甚古村……三六
掛け持ち……八四
侘助……九二
白毛……一一
本日休診……一一八
遙拜隊長……一五三
ワサビ盗人……一六六
開墾村の與作……一七一
驛前旅館……一七九
晩春の旅……二四八
艶書……二五四
猫……二五八
昨日の會……二六二

琴の記……二六五
ささやま街道……二七〇
備前街道……二八〇
消えたオチョロ船……二九一

厄よけ詩集　抄

作品解説……河上徹太郎　四八二
井伏鱒二入門……淺見　淵　四八八
年　譜……四九五
参考文献……五〇九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

永井龍男集　目次

筆蹟

黒い御飯……三〇一
手袋のかたつぽ……三〇三
『あひびき』から……三一三
菊と飛行機……三三三
朝霧……三三一
青電車……三四二
うねり……三四九
風……三五五
そばやまで……三六〇
狐……三六六
風ふたたび……三七六
白い柵……四五二
をんなのひと……四五七
小美術館で……四六三
蜜柑……四六七
蠅……四七二
カードの遊び……四七三
五銭銅貨……四七四

四季の時計……四七六
いびきに就て……四七八

俳句抄

作品解説……河上徹太郎　四八五
永井龍男入門……淺見　淵　四八八
年譜……五〇三
参考文献……五一〇

井伏鱒二集

たよがい様子を廂にかけ

描者はのろのろと屋根にのぼる

つめたいが棟瓦にまたがると

こりゃ甚だ眺めがよい

ところで今日は暮の三十日

ままよ大膳いっぱくしてゐると

平野屋は霜どけの路を来て

今日も留守だねと歸って行く

歳末閑居

井伏鱒二

山椒魚

山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかへて外に出ることができなかつたのである。今は最早、彼にとつては永遠の棲家である岩屋は、出入口のところがそんなに狹かつた。そして、ほの暗かつた。強ひて出て行かうとこころみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロップの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の體が發育した證據にこそはなつたが、彼を狼狽させ且つ悲しませるには十分であつたのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎり廣く泳ぎまはつてみようとした。人々は思ひぞ屈せし場合、部屋のなかを屢々こんな工合に歩きまはるものである。けれど山椒魚の棲家は、泳ぎまはるべくあまりに廣くなかつた。彼は體を前後左右に動かすことができただけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑かに感觸され、彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、つひに苔が生えてしまつたと信じた。彼は深い歎息をもらしたが、あたかも一つの決心がついたかのごとく呟いた。

「いよいよ出られないといふならば、俺にも相當な考へがあるんだ。」

しかし彼に何一つとしてうまい考へがある道理はなかつたのである。

岩屋の天井には、杉苔と錢苔とが密生して、錢苔は綠色の鱗でもつて地所とり（小兒の遊戯の一種）の形式で繁殖し、杉苔は最も細く且つ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な實を結び、それは隱花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らしはじめた。

山椒魚は、杉苔や錢苔を眺めることを好まなかつた。寧ろそれ等を疎んじさへした。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散つたので、彼は自分の棲家の水が汚れてしまふと信じたからである。剩へ岩や天井の凹みには、一群づつの黴さへも生えた。黴は何と愚かな習性を持つてゐたことであらう。常に消えたり生えたりして、絶對に繁殖して行かうとする意志はないかのやうであつた。山椒魚は岩屋の出入口に顏をくつつけて岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川といふものは、滅茶苦茶な急流となつて流れ去つたり、意外なところで大きな淀みをつくつてゐるものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこでは水底に生えた一叢の藻が朗かな發育を遂げて、一本づつの細い莖でもつて水底から水面まで一直線に伸びてゐた。そして水面に達すると突然その發育を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせてゐるのである。多くの目高達は、藻の莖の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼等は莖の林のなかに群をつくつて、互に流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或る一ぴきが誤つて左によろめくと、他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。若し或る一ぴきが藻の莖に邪魔されて右によろめかなければならなかつたとすれば、他の多くの小魚達はことごとく、ここを先途

と右によろめいた。それ故、彼等のうちの或る一ぴきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走して行くことは甚だ困難であるらしかつた。

山椒魚はこれ等の小魚達を眺めながら、彼等を嘲笑してしまつた。

「なんといふ不自由千萬な奴等であらう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦を描いてゐた。それは水面に散つた一片の白い花瓣によつて證明できるであらう。白い花瓣は淀みの水面に廣く圓周を描きながら、その圓周を次第に小さくして行つた。そして速力をはやめた。最後に、極めて小さな圓周を描いたが、その圓周の中心點に於て、花瓣自體は水のなかに吸ひこまれてしまつた。

山椒魚は今にも目がくらみさうだと呟いた。

或る夜、一ぴきの小蝦が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や產卵期のまつただなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいに恰も雀の稗草の種子に似た卵を抱へて、岩壁にすがりついた。さうして細長いその終りを見屆けることができないやうに消えてゐる觸手をふり動かしてゐたが、いかなる量見であるか彼は岩壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをこころみて、今度は山椒魚の横つ腹にすがりついた。

山椒魚は小蝦がそこで何をしてゐるのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覺えたが、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が體を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去つてしまつたであらう。

「だが、このみもちの蟲けら同然のやつは、一たいここで何をしてゐるのだらう？」

この一ぴきの蝦は山椒魚の横腹を岩石だと思ひ込んで、そこに卵を產みつけてゐたのに相違ない。さもなければ、何か一生懸命に物思ひに耽つてゐたのであらう。

山椒魚は得意げに言つた。

「くつたくしたり物思ひに耽つたりするやつは、莫迦だよ。」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考へ込んでゐるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかへて、そこに嚴しくコロップの栓をつめる結果に終つてしまつた。それ故、コロップを拔くためには、彼は再び全身の力を込めて、うしろに身を退かなければならなかつたのである。

この騷ぎのため、岩屋のなかではおびただしく水が汚れ、小蝦の狼狽といつては並たいていではなかつた。けれど小蝦は、彼が岩石であらうと信じてゐた棍棒の一端がいきなりコロップの栓となつたり拔けたりした光景に、ひどく失笑してしまつた。全く蝦くらゐ濁つた水のなかでよく笑ふ生物はゐないのである。

山椒魚は再びこころみた。それは再び徒勞に終つた。何としても彼の頭は穴につかへたのである。

彼の目から涙がながれた。

「ああ神樣！　あなたはなさけないことをなさいます。たつた二年間ほど私がうつかりしてゐたのに、その罰として、一生涯この窖に私を閉ぢこめてしまふとは横暴であります。私は今にも氣が狂ひさうです。」

諸君は、發狂した山椒魚を見たことはないであらうが、この山椒魚に幾らかその傾向がなかつたとは誰がいへよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど暗黑の浴槽につかりすぎて、最早がまんがならないでゐるのを、諒解してやらなければならない。いかなる癲癇病者も、自分の幽閉されてゐる部屋から解放してもらひたいと絶えず願つてゐるではないか。最も人間嫌ひな囚人でさへも、これと同じことを欲してゐるではないか。

「ああ神樣、何うして私だけがこんなにやくざな身の上でなければ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ならないのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでゐた。彼等は小なるものが大なるものの背中に乘つかり、彼等は唐突な蛙の出現に驚かされて、出鱈目に直線を折りまげた形に逃げまはつた。蛙は水底から水面にむかつて勢ひよく律をつくつて突進したが、その三角形の鼻先を空中に現はすと、水底にむかつて再び突進したのである。

山椒魚はこれ等の活潑な動作と光景とを感激の瞳で眺めてゐたが、やがて彼は自分を感動させるものから、寧ろ目を避けた方がいいといふことに氣がついた。彼は目を閉ぢてみた。悲しかつた。彼は彼自身のことを譬へばブリキの切屑であると思つたのである。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬へてみることは好まないであらう。ただ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考へてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思ひに耽つたり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭つたりして、彼等ほど各々好みのままの恰好をしがちなものはないのである。

山椒魚は閉ぢた目蓋を開かうとしなかつた。何となれば、彼には目蓋を開いたり閉ぢたりする自由とその可能とが與へられてゐただけであつたからなのだ。

その結果、彼の目蓋のなかではいかに合點のゆかないことが生じたではなかつたか！　目を閉ぢるといふ單なる形式が巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗やみは際限もなく擴がつた深淵であつた。誰しもこの深淵の深さや廣さを言ひあてることはできないであらう。

――どうか諸君に再びお願ひがある。山椒魚がかかる常識に沒頭することを輕蔑しないでいただきたい。牢獄の見張人といへども、よほど氣難しい時でなくては、終身懲役の囚人が徒らに歎息をもらしたからといつて叱りつけはしない。

「ああ寒いほど獨りぼつちだ！」

注意深い心の持主であるならば、山椒魚のすすり泣きの聲が岩屋の外にもれてゐるのを聞きのがしはしなかつたであらう。

悲歎にくれてゐるものを、いつまでもその狀態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帶びて來たらしかつた。そして或る日のこと、岩屋の窓からまぎれこんだ一ぴきの蛙を外に出ることができないやうにした。蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロップの栓となつたので、狼狽のあまり岩壁によぢのぼり、天井にとびついて錢苔の鱗にすがりついた。この蛙といふのは淀みの水底から水面に、水面から水底に、勢ひよく往來して山椒魚を羨しがらせたところの蛙である。誤つて滑り落ちれば、そこには山椒魚の惡黨が待つてゐる。

山椒魚は相手の動物を、自分と同じ狀態に置くことのできるのが痛快であつたのだ。

「一生涯ここに閉ぢ込めてやる！」

惡黨の呪ひ言葉は或る期間だけでも効驗がある。蛙は注意深い足どりで凹みにはいつた。そして彼は、これで大丈夫だと信じたので、凹みから顏だけ現はして次のやうに言つた。

「俺は平氣だ。」

「出て來い！」

山椒魚は呶鳴つた。さうして彼等は激しい口論をはじめたのである。

「出て行かうと行くまいと、こちらの勝手だ。」

「よろしい、いつまでも勝手にしろ。」

「お前は莫迦だ。」

「お前は莫迦だ。」

彼等は、かかる言葉を幾度となくくり返した。翌日も、その翌日も、同じ言葉で自分を主張し通してゐたわけである。

一年の月日が過ぎた。

初夏の水や温度は、岩屋の囚人達をして鑛物から生物に蘇らせた。そこで二箇の生物は、今年の夏いつぱい次のやうに口論しつづけたのである。山椒魚は岩屋の外に出て行くべく頭が肥大しすぎてゐたことを、すでに相手に見ぬかれてしまつてゐたらしい。

「お前こそ頭がつかへてそこから出て行けないだらう？」

「お前だつて、そこから出ては來れまい。」

「それならば、お前から出て行つてみろ。」

「お前こそ、そこから降りて來い。」

更に一年の月日が過ぎた。二箇の鑛物は、再び二箇の生物に變化した。けれど彼等は、今年の夏はお互に默り込んで、そしてお互に自分の歎息が相手に聞えないやうに注意してゐたのである。

ところが山椒魚よりも先に、岩の凹みの相手は、不注意にも深い歎息をもらしてしまつた。それは「あああああ」といふ最も小さな風の音であつた。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の歎息を唆したのである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかつた。彼は上の方を見上げ、且つ友情を瞳に罩めてたづねた。

「お前は、さつき大きな息をしたらう？」

相手は自分を鞭撻して答へた。

「それがどうした？」

「そんな返辭をするな。もう、そこから降りて來てもよろしい。」

「空腹で動けない。」

「それでは、もう駄目なやうか？」

相手は答へた。

「もう駄目なやうだ。」

よほど暫くしてから山椒魚はたづねた。

「お前は今どういふことを考へてゐるやうなのだらうか？」

相手は極めて遠慮がちに答へた。

「今でもべつにお前のことをおこつてはゐないんだ。」

（大正十二年八月「幽閉」改題）

＊　＊　＊

逸題

今宵は仲秋明月
初戀を偲ぶ夜
われら萬障くりあはせ
よしの屋で獨り酒をのむ

春さん蛸のぶつ切りをくれえ
それも鹽でくれえ
酒はあついのがよい
それから枝豆を一皿

ああ　蛸のぶつ切りは膾みたいだ
われら先づ腰かけに坐りなほし
靜かに酒をつぐ
枝豆から湯氣が立つ

今宵は仲秋明月
初戀を偲ぶ夜
われら萬障くりあはせ
よしの屋で獨り酒をのむ　（新橋よしの屋にて）

（「厄よけ詩集」より）

鯉

すでに十幾年前から私は一ぴきの鯉になやまされて來た。學生時代に友人青木南八（先年死去）が彼の滿腔の厚意から私にこれをくれたものであるが、この鯉は餘程遠い在所の池から獲つて來たものであると其のとき青木南八は私に告げた。

鯉は其の當時一尺の長さで眞白い色をしてゐた。

私が下宿の窓の欄干へハンカチを乾してゐる時、青木南八はニウムの鍋の中に眞白い一ぴきの大きな鯉を入れて、その上に藻を一ぱい覆つたのを私に進物とした。私は、彼の厚意を謝して今後決して白色の鯉を殺しはしないことを誓つた。そして、私と彼は物差を出して來て、この魚の長さを計つたり、放魚する場所について語りあつたりした。

下宿の中庭に瓢簞の形をした池があつて、池の中には木や竹の屑がいつぱいに散らばつてゐたので、私はこの中に鯉を放つのを不安に思つたが、暫く考へた後で、矢張り止むを得なかつた。鯉は池の底に深く入つて數週間姿を見せなかつた。

その年の冬、私は素人下宿へ移つた。鯉も連れて行きたかつたのだが、私は網を持つてゐなかつたので斷念した。それ故、彼岸が過ぎて漸く魚釣りができはじめてから、私は以前の下宿の瓢簞池へ鯉を釣りに行つた。最初の日、二ひきの小さな鮒を釣りあげたので、これをそこの下宿の主人に見せた。主人は釣りに興味を持つてはゐないらしかつたが、鮒なぞがこの瓢簞池に居るとは思ひがけなかつたと言つて、次の日からは、彼も私と竝んで釣りをすることにした。

漸く八日目に、私は春蠶のさなぎ蟲で、目的の鯉を釣りあげることができた。鯉は白色のまま少しも痩せてはゐなかつた。けれど鰭の先に透明な寄生蟲を宿らせてゐた。私は注意深く蟲を除いてから、洗面器に冷水を充たして其の中に鯉を入れた。そして其の上を無花果の葉でもつて覆つた。

素人下宿には瓢簞池なぞはなかつた。それ故、私は寧ろひとおもひにこいつを殺してしまつてやらうかと思つて、無花果の葉を幾度もつまみあげてみた。鯉はその度毎に口を開閉して安息な呼吸をしてゐた。

私は相談するために、洗面器を持つて青木南八のところへ出かけた。

「君の愛人の家では泉水が廣いやうだが、鯉をあづかつてくれないかね？」

青木南八は少しも躊躇することなく、枇杷の枝のさしかかつてゐる池の端に私を案内した。私は鯉を池に放つ前に假令この魚は彼の愛人の所有にかかる池に棲ませたにしても、魚の所有權は必ず私の方にあることを力説した。私のこの言葉を寧ろ青木南八は、彼に對しての追從だと思つたらしく、彼は疎ましい顏色をした。何となれば私はこの魚を大事にすることを、嘗て彼に誓つたことがあつたからである。

鯉は私の洗面器の水と共に池の中に深く入つた。

それから六年目の初夏、青木南八は死去した。

私は屢々彼の病氣を見舞つてゐたのであるが、彼の病氣が重いなぞとは少しも思つてゐなかつた。寧ろ彼が散歩にもつきあはないのをもどかしく思つたり、彼の枕元で莫を喫つたりした。

私は博覽會の臺灣館で、大小二十四箇の花をつけたシャボテンを買つて、持つて行つて青木に贈ることにした。ところが彼の家にそ

の鉢を持つて行つた日に彼は亡くなつたのである。玄關の前に立つて幾度もベルを鳴らすと、彼の母親が出て來たのであるが、彼女は私の顏を見ると同時に涙を激しく流しはじめたばかりで、少しもらちがあかなかつたので、のみならず土間には幾つもの靴と共に、青木の愛人が常々はいてゐた可憐な女靴が急ぎ足に脫いであつたので、私はシャボテンの鉢を小緣の上に置いて歸つて來た。

二三日して彼の告別式の日には、亡き彼の柩の上に、彼の常々かぶつてゐたおしる粉色の角帽と竝べて私の贈つたシャボテンの鉢が置いてあつた。私は一刻も早く彼の愛人の家の泉水から白色の鯉を持つて歸りたいと思つた。青木南八が私に對して疎ましい顏色をしたのは、嘗て鯉のことについて一度だけであつたからである。

私は決心して青木の愛人に手紙を送つた。(青木の靈魂が私を誤解してはいけないので、ここに手紙の全文を複寫する。)

謹啓。青木南八君の御逝去、謹而弔問仕ります。却說六年以前青木君を介して小生所有の鯉(白色にして當時一尺有餘)一尾を貴殿邸內の泉水におあづけいたしましたが、此度何卒御返し下され度く御願ひ申します。ついては來る日曜、晴雨にかかはらず午前中より貴殿邸內の池畔に釣絲を垂れることをば御許可下され度く、尙ほ其のため早朝より裏門を少々御開き置きの程願ひます。

頓首

——返事が來た。(青木の靈魂が彼の愛人を誤解してはいけないので、ここにその全文を記載してみる。)

御手紙拜見いたしました。葬ひがあつて間もなく魚を釣るなぞと仰有るのは少し亂暴かとも存じますが、餘程お大事なものと拜しますれば、御申越の趣承知いたします。べつにお目にかかつたり御挨拶に出たりはしませんが、御遠慮なく魚だけはお釣り下さいまし。

草々

日曜の早朝、私は辨當ならびに釣竿、餌、洗面器を携へて、故青木南八の愛人の邸內に忍び込んだ。そして私は少なからず興奮してゐた。若しもの證據に手紙の返事を持つて來ればよかつたのである。

枇杷の實はすでに黃色に熟してゐて、新鮮な食慾をそそつた。のみならず池畔の種々なる草木は全く深く繁つて、二階の窓からも露臺の上からも私の姿を見えなくしてゐることに氣がついたので、私は釣竿を逆さにして枇杷の實をたたき落した。ところが鯉は夕暮れ近くなつて釣ることができたので、つまり私は隨分多くの枇杷の實を無斷で食べてしまつたわけである。

私は鯉を早稻田大學のプールに放つた。

夏が來て學生達はプールで泳ぎはじめた。私は毎日午後になるとプールの見物に通つて、圍ひの金網に顏を寄せながら彼等の巧妙な水泳ぶりに感心した。私は最早失職してゐたので、この見物は私にとつて最も適切なものであつた。——日沒近くなると學生達は水からあがつて、裸體のままで漆の木の下に寢ころんだり、また彼等は莨を喫つたり談笑したりする。私は彼等の健康な肢體と朗かな水泳の風景とを眺めて、深い嘆息をもらしたことが屢々であつたのだ。

學生達が最早むらきに水へとびこまなくなると、プールの水面は一段と靜かになる。そして直ぐさま燕が數羽水面にとび來たつて、ひるがへつたり腹を水面にかすめたりする。けれど私の白色の鯉は深く沈んでゐて、姿を見せはしない。或ひは水底で死んでしまつてゐるのかもわからないのである。

或る夜、あまりむし暑いので私は夜明けまで眠れなかつた。それ故、朝のすがすがしい空氣を吸はうと思つて、プールのあたりを歩きまはつた。こんな場合には誰しも、自分はひどく孤獨であると考へたり働かなければいけないと思つたり、或ひはふところ手をして永いあひだ立ち止つたりするものである。

「鯉が！」

この時、私の白色の鯉が、まことにめざましくプールの水面近く

を泳ぎまはつてゐるのを私は幾見したのである。私は足音を忍ばせて金網の中に入つて行つて、仔細に眺めようとして跳込臺の上に登つた。

私の鯉は、與へられただけのプールの廣さを巧みにひろびろと扱ひわけて、ここにあつては恰も王者の如く泳ぎまはつてゐたのである。のみならず私の鯉の後ろには、幾ひきもの鮒と幾十ぴきもの鮠と目高とが遲れまいとつき纏つてゐて、私の所有にかかる鯉をどんなに偉く見せたかもしれなかつたのだ。

私はこのすばらしい光景に感動のあまり涙を流しながら、音のしないやうに注意して跳込臺から降りて來た。

冷たい季節が來て、プールの水面には木の葉が散つた。それから氷が張つた。それ故、すでに私は鯉の姿をさがすことは斷念してゐたのであるが、毎朝プールのほとりへ來てみることは怠らなかつた。そして平らな氷の上に幾つもの小石を投げて遊んだ。小石は輕く投げれば速かに氷の上を滑つて冷たい音をたてた。若し力をいれて眞下に投げつけると、これは氷の肌にささつた。或る朝、氷の上に薄雪が降つた。

私は長い竹竿を拾つて來て、氷の面に繪を描いてみた。長さ三間以上もあらうといふ魚の繪であつて、私の考へでは、これは私の白色の鯉であつた。

繪が出來上ると、鯉の鼻先に「……」何か書きつけたいと思つたがそれは止して、今度は鯉の後ろに多くの鮒や目高が遲れまいとつき纏つてゐるところを描き添へた。けれど鮒や目高達の如何に愚かで慘めに見えたことか！　彼等は鰭がなかつたり目や口のないものさへあつた。私はすつかり滿足した。

（大正十五年九月）

屋根の上のサワン

おそらく氣まぐれな狩獵家か惡戯ずきな鐵砲うちかが狙ひ擊ちにしたものに違ひありません。私は沼池の岸で一羽の雁が苦しんでゐるのを見つけました。雁はその左の翼を自らの血潮でうるほし、滿足な右の翼だけ空しく羽ばたきさして、水草の密生した濕地で悲鳴をあげてゐたのです。

私は足音を忍ばせながら傷ついた雁に近づいて、それを兩手で拾ひあげました。そこで、この一羽の渡り鳥の羽毛や體の溫かみは私の兩手に傳はり、この鳥の意外に重たい目方は、そのときの私の思ひ屈した心を慰めてくれました。私はどうしてもこの鳥を丈夫にしてやらうと決心して、それを兩手に抱へて家に持つて歸りました。そして部屋の雨戸を閉めきつて、私は五燭の電氣の下でこの鳥の傷の治療にとりかかつたわけです。

けれど雁といふ鳥は、ほの暗いところでも目が見えるらしく、洗面器の石炭酸やヨードフォルムの瓶を足蹴にして、私の手術しようとする邪魔をします。そこで少しばかり手荒らではありましたが私は彼の兩脚を糸で縛り、暴れる彼の右の翼をその胴體に押しつけ、さうして細長い彼の首を私の胯の間に挾んで、

「ぢつとしてゐろ！」

と叱りつけました。

ところが彼は私の親切を極端に誤解して、私の治療が終つてしまふまで、私の胯の間からは、あの秋の夜更けに空を渡る雁の聲がし

きりにきこえたのです。

治療が終つてからも、私は傷口の出血がとまるまで彼を縛つたままにしておきました。さもなければ彼は部屋のなかを暴れまはつて、傷口に塵が入るおそれがあつたからです。

私は治療の結果が心配でした。手術の器械など私は持つてゐないので、鉛筆削りの小刀でもつて、彼の翼から四發の散弾をほじくり出し、その傷口を石炭酸で洗つて、ヨードフォルムをふりかけておいたのです。六發の散弾が翼の肉の裏側から入り込んで、そのうちの二發は肉を裏から表に突きぬけてゐました。多分この鳥を狙ひ撃ちにした男は、雁が空に舞ひあがつたところを見て、銃の引金を引いたのでせう。そして弾丸にあたつた雁は、空から斜めに落ちて來て、負傷の痛手が治るまで水草のなかで休んでゐるつもりでゐたのでせう。恰度そこへ私が通りかかつたわけで、そのとき私は、言葉に言ひ現はせないほどくつたくした氣持で沼池の岸を散歩してゐたのです。

私は、縛つたままの雁を部屋のなかに置き去りにして、隣の部屋で石炭酸のにほひのする手を洗つたり、雁に與へる餌をつくつたりしてゐました。けれど私自身はたいへん疲れてしまつてゐるのに氣がついて、私は火鉢に凭れて眠ることにしました。かういふ眠りといふものは屢々意外に長い居眠りとなつてしまふものです。そして夜更けになつてからでなくては、目がさめないといふやうなことがあります。

私は眞夜中ごろになつて目がさめました。けたたましい雁の鳴き聲によつて目をさましたのです。隣の部屋で傷ついた雁は甲高く且つ短く三度ほど鳴きました。足音を忍ばせて襖の隙間からのぞいてみると、雁は脚や翼を縛られたまま、五燭の電燈の方に首をさしのべて、もう一度鳴いてみたいやうな樣子をしてゐました。恐らくこの負傷した渡り鳥は、電燈の灯りを夜更けの月と見違へたのでせう。

雁の傷がすつかり治ると、私はこの鳥の兩方の翼を羽根だけ短く切つて、庭で放飼ひにすることにしました。この鳥は非常に人なつこい鳥らしく、私が外出するときには門の出口まで私の跡をつけて來たり、夜更けになると家のまはりを歩き廻つたりして、恰かも飼犬がその飼主に仕へるのと少しも變りませんでした。私はこの鳥にサワンといふ名前をつけ、野道や沼池への散歩に連れて出かけたりしたのです。

「サワン！　サワン！」

サワンは眠さうな足どりで私の跡について來ます。

沼池は、すでに初夏の裝ひをしてゐました。その岸には私の背丈と殆んど同じ高さに細い葦の青草が繁り、水面には多くの水草の廣い葉や純白の花が成育してゐました。サワンはどうやらこの沼池を好んだらしいのです。彼は水に滑り込むと、短い翼で羽ばたきしたり尾を振つたりして、彼がこの水浴に倦きてしまはなければ、私がいくら呼んでも水から上つて來ませんでした。さういふとき、私は叢に寢ころんで常に私自身の考へに耽るのが慣はしでありました。なるほど私はサワンの水浴を見守るために沼池へ出かけたのではなく、私のくつたくした思想を追ひはらふために散歩に出かけたのです。

サワンは水面に浮かぶことを好んだのみでなく、水に潜ることをも好みました。時としては十幾分間も水中にひそんでゐることさへもありました。しかし幸ひにしてこの沼池の水はよく澄んでゐたので、私はサワンが水底を駈まはつたり餌を漁つたりする姿を見物することができました。

雁といふ鳥は、元來、晝間の光線や太陽熱を好まないものらしいです。私がサワンをうつちやつておく時には、彼は終日、廊下の下にうづくまつて晝寢ばかりする習性でした。けれど夜は（私は庭の木戸を閉ぢて彼が逃亡しない仕掛けにしておいたのですが）サワンは垣根を破らうとしたり木戸を跳び越えようとしたりして、なかな

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com